学位論文要旨

戦後日本における教師批判言説の影響に関する社会学的研究

― 教員免許更新制を事例として ―

広島大学大学院教育学研究科

教育学習科学専攻

D180538　　周　正

Ⅰ．論文題目

戦後日本における教師批判言説の影響に関する社会学的研究
―教員免許更新制を事例として―

Ⅱ.論文構成

序章　研究の目的

第１節　問題の所在

第２節　先行研究の検討

第３節　本研究の課題と構成

第１章　教師像研究の検討

第１節　日本の教師研究の課題

第２節　言説による教師像研究の蓄積

第３節　本研究における分析の枠組み

第２章　教師言説の変容

―新聞社説を中心にして

第１節　問題の所在

第２節　分析の視点

第３節「教育の労働者」から「教育問題の元凶」へ

第４節「教育問題の元凶」から「教育の〈専門家〉」へ

第５節　まとめと考察

第３章　教員政策への影響

―政府文書に着目して

第１節　問題の所在

第２節　分析の視点

第３節　「〇〇教養」が求められる時代

第４節　「実践的指導力」の萌芽が見られた時代

第５節　「実践的指導力」が定着した時代

第６節　教師に求められる資質能力が多様化した時代

第７節　まとめと考察

第４章　教師批判による教員政策

―教員免許更新制の成立

第１節　問題の所在

第２節　導入までの経緯

第３節　制度への強い批判

第４節　教員免許更新講習の現状

第５節　まとめと考察

第 5 章　政策の教員への影響
―教員免許更新制をめぐる教員の意識
第 1 節　問題の所在
第 2 節　調査の概要
第 3 節　教員免許更新制への期待
第 4 節　教員免許更新制に対する考え方・意見
第 5 節　まとめと考察
第 6 章　教員による政策の評価
―教員は教員免許更新制をいかに評価しているのか
第 1 節　問題の所在
第 2 節　教員免許更新制の評価
第 3 節　教員免許更新制に対する評価の規定要因
第 4 節　自由記述に見る期待と批判
第 5 節　まとめと考察
終章　要約と考察
第 1 節　結果の要約
第 2 節　考察と課題
引用参考文献

Ⅲ．論文要旨

序章　研究の目的

本研究の目的は、教師をめぐる批判的言説がどのように構築され、それが現場の教員にまでいかに影響したのかを明らかにすることである。序章では、主に教師像に関する先行研究の議論を整理、検討することで、本研究の目的と課題を明確にした。

1970 年代の日本では、量的拡大に伴う学校教育の機能障害が現れたと指摘されている（今津 2017, p.50）。その結果、さまざまな教育問題が噴出した。学校や教師は、これらの教育問題の責任を問われ、批判の対象とされてきた。そのような状況において、2000 年代以降はさらに、経済的背景としてのグローバリゼーションと政治的背景としての国民国家の揺らぎの中で、「教師の質の低下」が懸念され、教育改革の中でもとくに、教師の質の向上に焦点をあてた政策が推進されている。こうした教師批判に根差した教育改革により、人々が教師に向けるまなざしは一層批判的になり、その結果さらに教師が批判される、という悪循環が生じている（佐久間 2007, pp.147−148）。

しかしながら、このような教師に対する批判は妥当なものではない（山田 2013, 佐々木 1998）。それにもかかわらず、教師が批判されるようになった原因は何だろうか。

先行研究では、教師批判の原因の背景にあるのは、教師への期待が過度に高まったことで

ある（越智 2000, 陣内 2007）。その際、教師への期待を作り出したのが固定的な教師像である。日本の社会では教師に対する、強く固定された一元的なイメージ、すなわち、「理想的教師像」がすでに存在していた。このように社会から期待される「理想的教師像」を基準に現実の教師は評価されている。その一方で、「理想的教師像」に当てはまらない現実の教師への批判が高まることになる。また、教師自身の行為や意識も「理想的教師像」に縛られてしまう。

以上のような状況により、山田（2018, p.439）は、社会も教師自身も、さらには研究者も教師像を批判的にとらえ、一元的な教師像から抜け出すことが必要だと指摘している。しかし、こうした目的で行われた先行研究は教師研究の中ではさらにごく少数に過ぎない。わずかに油布（1999）、山田（2004, 2010）が代表的な研究としてあげられよう。

油布（1999）は、学校で生じた事故に関する新聞記事を手掛かりとして、50 年代から 80 年代にかけての教師の役割・仕事の内容を探り、期待される教師像の変化を明らかにした。また、山田（2004）は、主にマンガを用い、描かれた教師や学校に関する事象を現実の状況と対比しながら分析し、マンガに描かれた固定的・一元的な「理想的教師像」を提示した。さらに、70 年代から 90 年代にかけての文芸メディアに描かれる教師像を「熱血教師」を手掛かりとして検討し、教師に対するまなざしを相対化させるとともに、個々の教師の多様性に着目することの重要性を指摘した（山田 2010）。これらの先行研究は、いずれも 1980 年頃に教師へのまなざしが批判的なものへと変容したことを指摘している。

これらの研究は、戦後日本の教師像の社会的構築を明らかにする上では重要な成果であるといえる。しかしながら、これらの研究には主に 4 つの問題点が残されている。

1 つ目は、描き出した教師像が限定的なものに過ぎないことである。2 つ目は、マクロな歴史的分析が不十分、つまり長いスパンでの教師像の変化が捉えられていないことである。3 つ目は、教師に対するまなざしが持つ力が看過されてきたことである。4 つ目は、教師に対するまなざしを教師自身どのように受容しているのかが検証されていないことである。

以上のような先行研究の 4 つの問題点を踏まえて、本研究では教師をめぐる批判的言説がどのように構築され、それが現場の教員にいかなる影響を与えたのかを明らかにすることを目的とする。この目的を達成するため、次の 3 つの研究課題を設定した。第 1 に、戦後日本の教師をめぐる言説およびその変容を明らかにする。この研究課題では、先行研究の 1 つ目の問題点である、描き出した教師像が限定的なものであること、そして 2 つ目の問題点である、マクロな歴史的分析が不十分であることを解決する。第 2 に、教師をめぐる言説がいかに教員政策の形成に影響を与えたのかを検討する。このことにより、先行研究の 3 つ目の問題点、つまり教師に対するまなざしが持つ力を検討する。第 3 に、教師言説、とくに批判的言説により形成された政策がいかに当事者である教師に影響を与えているのかを分析する。いわゆる先行研究の 4 つ目の問題点、教師に対するまなざしを教師自身どのように受容しているのかに対し検証することである。この 3 つの研究課題に取り組むことで、教師をめぐる言説およびその影響を明らかにする。

具体的には、まず、教育社会学では教師像に関する先行研究はどのように展開したのかを検討し、本研究における分析の枠組みを提示した（第 1 章）。戦後からの新聞社説を分析し、現在までの教師像の変容を解明した（第 2 章）。また、審議会の答申を読み解き、教師に対する社会的まなざしはいかに政府文書の中で反映されているのかを検討した（第 3 章）。さらに、教師をめぐる批判的言説の解決策として作られた教員免許更新制を取り上げ、更新制はどのように作られて、いかなる政策であるかを解明した（第 4 章）。このように実施した教員政策に対し、教員の意識を明らかにするために、アンケート調査を行い、教員の意識（第 5 章）およびその規定要因（第 6 章）を明らかにした。その上で、本研究の議論を総括し、主な知見と本研究の意義、今後の課題を示した。（終章）。

第 1 章　教師像研究の検討

本章では、これまでの教育社会学の領域における、教師に関する研究を整理し、言説による教師像研究の重要性を述べた。このことを通して、先行研究の課題と本研究の位置づけを検討し、分析の枠組みを明確にした。

まず、本研究では、教師を偏った教師像から脱構築する試みの一環として位置付けられている。そのうえ、教師をめぐる批判的言説を世論形成から、教員政策形成に、さらに教師自身への影響を多角的に検討する。このことは、言説による教師像研究が残されている課題、つまり、言説が持っている力が現実への影響を明らかにすることができる。本研究では、単なる教師をめぐる言説を提示し、新たな教師像を作り出すことではなく、これらの言説が教員政策形成にいかなる影響力を持ったのか、また、教師がいかに受容されたのかをさらに検証することができる。

第 2 章　教師言説の変容―新聞社説を中心にして

本章では、先行研究と異なる視点かつ長いスパンで教師像を読み解き、教師をめぐる言説の歴史経過をさかのぼる。具体的には、新聞社説の中で教師をめぐる語りを分析し、戦後から現在にかけての教師像がいかに変容したのかを検討した。その結果、1945 年から現在までの戦後全般にわたる時期を対象とし、新聞社説の語りに表れた教師像は、以下の三つの時期で変化したといえる。すなわち、1945 年から 1970 年代前半までの「教育の労働者」、1970 年代後半から 2000 年代までの「教育問題の元凶」への転換、さらに 2000 年代以降の「教育の〈専門家〉」[1]への転換である。その中でも、とくにこれまでの言説による教師像研究により言及されていない 2000 年代以降の教師をめぐる語りを読み解くことは重要な意義を持っていると考えられる。

[1]ここで使われている「教育の〈専門家〉」は、教育の「専門職」とは異なる意味である。2000 年以降、教師に対する論調が支持的なものに変わると同時に、教師を〈専門家〉と言及するものが多くなった。これは、かつて議論された「専門職」という特殊な職業を指す言葉とは異なり、本務である教育に専念すべき職業人という意味で用いられている。

第 3 章　教員政策への影響―政府文書に着目して

本章では、教師をめぐる言説が、どのように政府文書に影響を与え合っているのかを検討した。具体的には、審議会答申のなかの教師の資質能力についての語りを分析することで、教師に求められる資質能力観の変化を検討した。分析の結果、戦後から現在までの教師に求められる資質能力の変化と新聞社説に表れた教師像との関連は、以下の三つの時期で分けることができる。

社説のなかで教師が「教育の労働者」と書かれている 1970 年代まで、政府文書では教師に「〇〇教養」と呼ばれる基礎的な能力が主に求められている。次に、1970 年代後半からは、社説のなかで教師が「教育問題の元凶」として捉えられる一方で、政府文書では「実践的指導力」が重視されている。最後に、教師を「教育の〈専門家〉」とする 2000 年代以降は、政府文書では「自律的に学ぶ」、「多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的」、「情報活用力」、「課題解決力」など、多様化した資質能力が求められている。

第 4 章　教師批判による教員政策―教員免許更新制の成立

本章では、教師をめぐる言説が持つ力に焦点を当て、これらの言説が教員政策まで影響していることを検討した。具体的には、「不適格教師」、「指導力不足教師」という教師批判言説の解決策として成立した教員免許更新制に着目し、制度が成立するまでの経緯と導入後の現状が明らかになった。導入時には否定されたものの、当初、教員免許更新制は「不適格教員の排除のために」導入する必要があると唱えられていた。また、教員免許更新制は多数の問題点が解決されないまま、強引に実施されたものでもあった。しかし、文部科学省による事後評価の結果には、9 割以上の教員が更新講習に評価している。つまり、このような教師批判言説から作られた教員政策に対しても、現在の教員は受容的であり、政府の政策を批判せず受け入れているとも解釈された。

第 5 章　政策の教員への影響―教員免許更新制をめぐる教員の意識

本章では、教師批判言説がいかに当事者である教師に影響を与えているのかを分析する。具体的には、教師批判言説から作り出された教員免許更新制を、教師の視点から読み解いた。その結果、教員免許更新制に対しては、時間的・経済的な負担から強く批判されている一方で、大学での講義には一定の評価がなされていた。「反対」という態度を表明する教員が 6 割近くを占めており、教員が教員免許更新制に強い反感を持っていることがわかった。前章で指摘した文部科学省が公表した事後評価は、講習直後に実施された各々の講習に対する評価でしかない。実際には多くの教員が、今もなおこの制度に対し否定的であることがわかった。

第 6 章　教員による政策の評価―教員は教員免許更新制をいかに評価しているのか

本章では、教師批判言説から作り出された教員免許更新制に対する教員の評価、およびそ

の規定要因を明らかにした。具体的には、どのような特徴を持った教員が、教員免許更新制を肯定的に、あるいは否定的に捉えているのかを検討した。このことにより、教育現場に身を置く教員がいかに批判的言説をもとにして教員政策を評価するのか、どのような要因がこのような政策に影響を及ぼすのか、および今後の教員免許更新制のあり方、さらに、教員政策の改革の方向性を示したい。分析の結果、教員免許更新制に対する教員の評価は、教員仕事の負担、教職に対する態度などの変数が否定的な影響を与えていることが明らかになった。また、自由記述を見れば、教員には強烈な不満が募っていることがわかった。ようするに、世論の批判的言説から作り出された教員政策に対し、教員が否定的に捉えられている。原因はそもそも仕事が多忙であり、教職に対する不満があることである。つまり、重回帰分析の結果により、教員免許更新制に対する教員の評価は、教員の職場環境を改善し、教職に対するマイナスのイメージを払拭することで高くなると考えられる。

終章　要約と政策的示唆

終章では、教師をめぐる批判的言説の形成およびその影響はいかに教員自身まで影響を与えたのか、という本研究の議論を総括し、主な知見と本研究の意義、今後の課題を示した。各章に示した知見を踏まえ、以下では本研究の考察について要約的に述べておきたい。

まず、本研究では、現在までの教師をめぐる言説の歴史的経過を明らかにした。この作業は、教師に対するイメージを相対化するための試みの一つとして重要な意義を持つものである。このことを通して、教師像を批判的にとらえ、教師像が形成される要因を検討することへの呼びかけである。分析結果からわかるように、社説の中での教師像の変化は、社会による学校・教師に対する役割期待が変化した結果だと考えられる。無論 2000 年代以降の社説に表れた教師像は、90 年代までの「教育問題の元凶」を形成していた過剰な期待が裏返されただけだと考えることもできる。実際に、教師をめぐる語りは否定的なものから肯定的なものへと劇的に逆転した。しかし、その一方で「教育の〈専門家〉」という新たな一元化された教師像が徐々に構築されているとも考えられよう。一見、教師に対して支持的で肯定的な論調の背後には、教師に対する困難で過剰な期待が含まれていることを無視できない。それから、このような肯定的な論調はまた変化することも起こりうるだろう。したがって、今後も、山田（2018, p.439）が指摘しているように、社会も教師自身も、さらには研究者も教師像を批判的にとらえ、一元的な教師像から抜け出すことが必要であると考えられる。

次に、本研究では、教師をめぐる言説はいかなる教員政策形成までに影響を与えたのかを明確にした。このことは、教師をめぐる言説が現実の社会や教育政策への影響力を看過できないことを示した。本研究で明らかにしたように、教師への批判的言説は 1970 年代後半にいったん構築され、それがマスメディアによって喧伝されることで現在まで継続して現実の社会や教育政策に影響を与えている。2000 年代以降、教師をめぐる語りの論調は、1970 年代後半以降のような批判的なものが徐々になくなり、教師を守るように変化している。つまり、教師を批判するのではなく、支持し、その労働環境の改善を求める考え方が強くなっ

ている。しかし、教育政策を見れば依然として教師への不信に基づいた改革が実施されている。例えば、本研究でとりあげた事例としての教員免許更新制の導入、教員評価制度の改革、さらに「コアカリキュラム」による教員養成の画一化などは、全て学校、教師への批判的言説を前提としたものである。これらの教員政策は、さらに教師の職場環境を悪化させたとされる（広田 2011, 山田 2013, 苅谷・金子 2008, 濱中 2018）。今後、現在の教師像の変化を反映させながら、いかに教師への「信頼」にもとづく教育改革を実施するのかが喫緊の課題である。

最後に、本研究では、教師をめぐる批判的言説はいかに当事者である教師に影響を与えているのか、教師自身がいかに受容しているのかを検討してきた。このことにより、構築主義的アプローチの限界を乗り越える一つの方法を示した。本研究では、教師に対するまなざしを明らかにするために、構築主義的アプローチによる言説分析を行った。しかしながら、構築主義的アプローチの限界としてあげたように、メタ分析である言説分析の結果は、別の言説を作り出すことで終わってしまうという課題が残る。研究ではこの課題を払拭するために、単なる教師をめぐる言説を提示し、新たな教師像を作り出すことではなく、さらにこれらの「言説」と「実践」の相互行為がどのように行われてきたのか、当事者にどのような影響を与えたのかも考察した。

以上の考察を踏まえて、本研究では、教師をめぐる批判的言説の形成から、それが教員政策形成に、さらに教師自身へ与える影響を検討した。このことにより、教師をめぐる批判的言説がどのように構築され、それが現場の教員にいかに影響したのかを明らかにした。しかしながら、本研究では教師批判言説から作り出された教員免許更新制を事例として分析したが、ほかの教師への不信に基づいた改革も多数実施されている。今後、さらにほかの言説によって改革された教員政策に着目する必要がある。

引用文献

今津孝次郎，2017,「教師専門職化の再検討—教職専門性に関する諸概念—」『新版・変動社会の教師教育』名古屋大学出版社，pp. 46−77.

越智康詞，2000,「『制度改革』のなかの教師—教育の専門性・公共性・臨床性の確立に向けて」永井聖二・古賀正義編『〈教師〉という仕事＝ワーク』学文社，pp. 143−165.

苅谷剛彦・金子真理子，2008,『教員評価の社会学』岩波書店。

佐久間亜紀，2007,「教師の学びとその支援—これからの教員研修—」油布佐和子編『転換期の教師』放送大学教育振興会，pp. 136−150.

佐々木賢，1998,「とらわれと呪縛」佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典編『岩波講座現代の教育　第 6 巻　教師像の再構築』岩波書店，pp. 48−72.

陣内靖彦，2007,「教師像の歴史的変遷」油布佐和子編『転換期の教師』放送大学教育振興会，pp. 94−107.

濱中淳子，2018,「教育世論」日本教育社会学編『教育社会学事典』丸善，pp. 740−741.

広田照幸，　2011,『教育論議の作法―教育の日常を懐疑的に読み解く』時事通信社，pp. 92−104.
山田浩之，2004,『マンガが語る教師像』昭和堂。
———，2010,「信頼と不信」『教育社会学研究』第 86 集，pp. 59−74.
———，2013,「『教員の資質低下』という幻想」『教育学研究』第 80 集，pp. 53−65.
———，2018,「ゆらぐ教師像」日本教育社会学編『教育社会学事典』丸善，pp. 438−439.
油布佐和子，1999,「教師は何を期待されてきたか―教師役割の変化を追う」油布佐和子編『教師という仕事』日本図書センター，pp. 71−85.
油布佐和子編，2015,『現代日本の教師―仕事と役割』放送大学教育振興会。
油布佐和子・山田浩之，2018,「概説：改革の時代の教師と教師研究の現在」日本教育社会学編『教育社会学事典』丸善，pp. 408−411.